OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	鉄剣と古墳出現期社会
Author(s)	Ryan, Joseph
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69693
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名	（RYAN JOSEPH　　）
論文題名	鉄剣と古墳出現期社会

論文内容の要旨

３世紀中葉から７世紀初頭までの古墳時代に、畿内地域の巨大前方後円墳を筆頭に日本列島各地で数多く築造された古墳は、ヤマト政権の成立と発展、すなわち日本列島の古代国家形成過程を示す資料として評価されている。古墳においては葬送儀礼の荘厳化が顕著であり、副葬品の多量化もその重要な要素をなしているが、なかでも鉄で造られた武器が数多く副葬されることは、大きな特徴である。古墳時代には、ヤマト政権と政治的連携を深めた地域有力者に対して、最新の武器を含む器物が優先的に配布されたと見る理解が通説となっている。しかし、これらの鉄製武器の多量副葬を可能とした生産・流通体制の実態や、初期ヤマト政権がこの体制を管理するに至った具体的な過程は、未だに不明瞭と言わざるを得ない。

そこで本論では、汎列島的に数多く出土し、通史的、体系的な検討が可能である鉄剣を主な検討対象として、考古学的手法によってその型式変化、生産と流通のあり方などを考察し、初期ヤマト政権へ向かう古墳出現期社会の実態を解明・提示する。

第１章では、本論の学史的位置づけを明らかにするために、日本列島における鉄と社会変化や権力形成の関係、および古墳出現期前後における鉄製武器の生産・流通・保有のあり方に関する研究史を整理し、本研究が取り組むべき方向性を定めた。

第２章では、鉄剣に焦点を絞り、各研究者の型式分類と変遷観、そしてそれぞれの共通点と相違点を確認した。また、鉄剣の生産、流通、および政治権力との関係をめぐる研究史を詳細に整理した上で、課題を指摘し、本論における鉄剣研究のアプローチを明確にした。

第３章では、出土鉄剣の全国集成に基づいて全長を指標にした型式分類を行ない、弥生中期後半から古墳前期前葉にかけての包括的な鉄剣変遷を検討した。その結果、①小型品の増加および鉄剣の身部と茎部に見られる扁平化を根拠に、中国大陸および朝鮮半島に由来する舶載品から、日本列島における在地生産品への比重が大きくなる第１の画期（弥生後期中葉）、②小型品の割合の増加および新型式（長茎短剣）の出現と広域分布から確認できる第２の画期（弥生終末期以降）、③鉄器製作技術の革新を受けて大型品が増加する第３の画期（古墳前期前葉）の存在を明確にすることができた。

第４章では、長茎短剣の資料状況を精査し、既往の変遷観に再検討を加えつつ、日本列島における長茎短剣の成立過程とその推移を論じた。とくに従来、十分明確にされてこなかった弥生後期段階の状況、弥生後期末以降の様相について整理し、関部や茎部の特徴を手掛かりに、漢系舶載品の可能性が高い「中期後半群」と朝鮮半島の影響下で成立した可能性が高い「終末期群」の二者を設定するとともに、その間に空白期があることに注目して、列島における展開過程を提示した。

第５章では、前章の成果を踏まえ、古墳前期における長茎短剣の生産と流通およびその保有層像について考察した。その結果、①出土古墳の墳形、規模、共伴遺物の比較を通じて、長茎短剣の全長に基づく緩やかな「階層構造」が存在したこと、②長茎短剣の小型品がより長い剣の再加工品ではなく、意図的に製作されたものである可能性が高いこと、③一定の規範に沿って製作された同形同大品が小地域内の小規模古墳を中心に共有されたが、広域流通する場合もあることなどを明らかにした。また、大型の長茎短剣や長剣が良質の副葬品と共に前方後円（方）墳など大型の古墳に副葬されることが比較的多いのに対して、小型の長茎短剣は在地的な墓制や小型円墳・方墳に副葬される傾向が強いことから、前者が初期ヤマト政権から有力首長に配布されたものであるのに対して、後者は弥生時代以来の地域関係の中にある在地小有力者の保有物であると評価し、鉄製武器の生産・流通体制と初期ヤマト政権による地域支配方式の関連を指摘した。

第６章では、日本列島における長剣の型式分類と編年を行なった上で、弥生中期後半から古墳前期初頭にかけての長剣の製作地と流通経路を考察した。また、朝鮮半島出土長剣の変遷をふまえ、これらと日本列島出土資料の形態および法量の比較を通して、舶載品と日本列島製品の抽出を試みた。その結果、①朝鮮半島南部からの舶載長剣は基本

的に弥生後期後葉以降に限られること、②北部九州では、薄い茎部厚と直角関を特徴とする短茎長剣が主体的であるのに対して、日本海沿岸諸地域から東日本では、北部九州出土例と同様な特徴を備えた長剣と、茎部が総じて厚く、非定型的な関部を持つ朝鮮半島的な長剣の両者が混在している状況が明らかとなった。従来、長剣の地域性や流通は、平面形態のみから検討されてきたが、茎部の厚さという着眼点を導入することによって、朝鮮半島製長剣が東日本に多いという従来からの指摘をより実証的に示すことができた。また、平面形態から北部九州製と考えられてきた資料においても、重厚な茎部を持つものの存在が明らかとなり、出土地と製作地の関係についてより確実な議論が可能となった。

第６章では東日本へ舶載鉄剣が数多く流入していたことを確認したが、同地域では近年、蕨手状装飾を持つ特異な長剣も出土しており、その系統について学界でも大いに注目されている。蕨手状装飾を持つ資料が多い朝鮮半島東南部の嶺南地域からの舶載品と評されることが多いが、詳細な比較がほとんどなされておらず、日本列島にもたらされた背景や意義についても明確にされてこなかった。そこで第７章では、朝鮮半島出土の蕨手形鉄剣を詳細に検討した上で、日本列島出土例との比較を通じて、それらの製作・流通のあり方を考察した。その結果、多様な蕨手形装飾を持つ鉄器が嶺南地域に基本的に限定される中で、蕨手形鉄剣は２世紀後半～３世紀前半の間に朝鮮半島中西部から日本列島中部高地まで急速に広範囲に分布するようになることを明らかにした。これらは流通経路の要衝と評価できる場所から出土し、共伴遺物などの様相から、流通の背景には嶺南地域との交流が窺えると指摘した。よって、流通網を確保するための集団間ネットワークの維持を目的として、蕨手形鉄剣が共有されるようになったと考えた。これにより、第６章で確認した東日本における舶載長剣の流入背景やその意義がより一層明確となった。

第８章では、関部双孔鉄剣の型式分類および、弥生中期後半から古墳中期中葉にかけての変遷と分布を検討し、従来からの変遷観を追認した一方で、生産と流通については２点の新たな理解を提示した。一つは、日本列島出土品が、従来一般的に考えられていた朝鮮半島から舶載品ではなく、列島において製作・加工されたものであるという理解である。朝鮮半島と日本列島出土の関部双孔鉄剣の法量と穿孔個所を比較した結果、前者が総じて幅広で、双孔を関部より茎部側に穿つのに対して、後者は関部より身部側に穿つという相違があることが判明したからである。いま一つは、古墳中期に属する関部双孔鉄剣が弥生時代以来の伝世品かどうかである。両者の法量と形態を比較した結果、大きな差異が確認でき、前者が古墳中期に新しく製作されたものであると判断した。実際、古墳前期後葉から中期にかけて様々な器物における復古的製作が指摘されているが、関部双孔鉄剣もその一例となる可能性を提起した。

第８章までの日本列島出土鉄剣の詳細な分析においては、弥生中期後半から古墳前期初頭にかけての社会背景や国際環境にも視野を広げた。ここまでの研究成果をさらに補強するためには、鉄剣以外の器物からの傍証が必要と考え、第９章では、古墳出現期社会の地域間関係や武器生産体制を明らかにする上で有効な資料である篦被付き鏃（茎関にスカート状の部位を持つ鏃）を取り上げ、弥生中期後半から古墳前期にかけて型式と分布の変遷過程を分析した。その結果、従来、初期ヤマト政権を特徴づける篦被付き銅鏃は北部九州の影響を受けて成立したと考えられてきたが、北部九州出土資料は弥生中期後半から後期後葉にかけて扁平化するのに対して、弥生終末期以降、近江から東海西部にかけて立体感に富む篦被付き銅鏃が製作されるようになることから、初期ヤマト政権の定型的な銅鏃に影響を与えたのは後者である可能性が高いと考えた。これに関連して、初期ヤマト政権の銅鏃に認められる身部側線が S 字状カーブを描く特徴が、早くから当該地域に認められることや、弥生終末期以降の奈良盆地出土土器および木製農具に東海西部の影響が窺えることなども、上述の影響関係を補強するものと位置づけた。

一方、古墳前期初頭という非常に限られた時期において、多種多様な形式の篦被付き鉄鏃が瀬戸内から北近畿にかけて分布するようになるが、これらは共伴遺物や出土古墳の諸相から見て、初期ヤマト政権とは直接の関係が薄い、やや分散的な地域生産によるものと推定した。ただし、これらが短期間のうちに消滅し、初期ヤマト政権を特徴づける篦被付き柳葉式に収斂されていく過程は、政権による政治的器物の管理強化の反映ととらえてその意義を指摘した。

各章の考察を総括した終章では、北部九州の「王」が前漢と政治的関係を結んだ弥生中期後半から、ヤマト政権が奈良盆地に成立する古墳前期初頭までの社会政治的動態を、鉄製武器のあり方に焦点をあてながら検討した。とくにヤマト政権の成立にあたっては、武器の生産・流通の管理がかならずしもその前提要因となったのではなく、武器の独占的掌握についても貫徹したものではなかったことが明らかとなった。ただ、ヤマト政権の側から見ると、一定の独自性を持つ北部九州勢力との関係も含めた広域流通網の維持とそこでの優位性、前方後円墳葬送儀礼の荘厳化に伴う「副葬鉄器」の増加などが、政権の中心性と政治権力の増大に役割を果たしたとの理解も可能である。さらに、古墳と集落から出土する鉄器に見られる技術的差異や、政権の正統性を象徴する上質の武器が管理の対象となった一方で、在地有力者による武器の生産と流通は一定程度存在していたことも重要である。以上の分析・検討によって、古墳出現期においては、中央政権が早熟的に国家的様相を対外的に備え始めた一方で、地域では弥生時代以来の生産、流通、地域間関係がなお継続していたと見る社会像を、本論の結論として提示した。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名（　RYAN　JOSEPH　）		
	（職）	氏　名
論文審査担当者	主 査　大阪大学　教授　福永　伸哉 副 査　大阪大学　教授　高橋　照彦 副 査　大阪大学准教授　市　大樹	

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　鉄剣と古墳出現期社会

学位申請者　RYAN　JOSEPH

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　福永伸哉

副査　大阪大学教授　　高橋照彦

副査　大阪大学准教授　市　大樹

【論文内容の要旨】

３世紀中頃の古墳出現期は、日本の古代国家形成過程における大きな画期である。本論文は、この国家形成過程において汎列島的に数多く出土し、体系的な分析が可能である鉄剣を主な対象として、考古学的手法によってその型式変化や生産・流通のあり方を検討し、初期ヤマト政権へ向かう社会の特質を解明したものである。全体は第１章から終章までの 10 章で構成されており、分量は 400 字詰原稿用紙換算で約 520 枚、図表 81 点である。

第１章では、日本列島における鉄と社会変化や権力形成の関係、及び古墳出現期前後における鉄製武器全般の生産・流通・保有のあり方に関する既往の研究を整理し、本研究が取り組むべき方向性を定めた。

第２章以下では、鉄剣を中心とした分析と考察を展開する。第２章では、鉄剣の生産・流通、政治権力との関係をめぐる研究史を詳細にトレースした上で課題を指摘し、本論文における鉄剣研究のアプローチを提示した。

これをうけた第３章では、出土鉄剣の全国集成に基づいて全長を指標にした型式分類を行ない、弥生中期後半から古墳前期初頭にかけての包括的な鉄剣の変遷を検討した。

第４章では、鉄剣の中でも弥生中期に出現し古墳出現期に顕著となる長茎短剣の資料状況を精査し、既往の変遷観に再検討を加えつつ、日本列島における長茎短剣の成立過程とその推移を論じた。そして、漢系舶載品の可能性が高い「弥生中期後半群」と朝鮮半島の影響下で成立した可能性が高い「弥生終末期群」の２者を設定するとともに、その間に空白期があることに注目して、列島における展開過程を提示した。

第５章では、古墳前期における長茎短剣の生産と流通及びその保有層について考察し、大型の長茎短剣が大型古墳に、小型の長茎短剣は小型の円墳・方墳に副葬される傾向が強いことから、前者が初期ヤマト政権から有力首長に配布されたのに対して、後者は弥生時代以来の交流網の中で、在地有力者が従来の技術で製作された製品を入手した結果であろうと推定し、鉄製武器の生産・流通実態から政権による地域支配の特徴に論及した。

第６章では、日本列島における長剣の型式分類と編年を行なった上で、弥生中期後半から古墳前期初頭にかけての長剣の製作地と流通経路を考察し、朝鮮半島南部からの舶載長剣は基本的に弥生後期後葉以降に限られること、北部九州では茎部厚の薄い直角関を持つ短茎長剣が主体的であるのに対して、日本海沿岸諸地域から東日本では、北部九州的な長剣と、厚い茎部と非定型的な関部を持つ朝鮮半島系の長剣の混在状況が見られるとした。

第７章では、東日本で散見される蕨手状装飾を持つ特異な鉄剣の系譜を検討した。多様な蕨手状装飾が流行す

る朝鮮半島南部の嶺南地域と比較した結果、東日本の蕨手状装飾鉄剣も２世紀後半～３世紀前半に分布域を広げた嶺南系鉄剣の流れの中に位置づけられることを指摘し、それらの出土した地域を結ぶ国際的な流通網の存在を想定した。これにより第６章で確認した東日本における舶載長剣の流入背景やその意義がより一層明確となった。

第８章では、弥生後期の代表的な鉄剣である関部双孔鉄剣を取り上げ、構造と変遷を検討した。そして、法量や穿孔位置を詳細に比較した結果、日本出土の関部双孔鉄剣は日本列島で製作されたものと判断した。

第９章では、古墳出現期の武器生産の実態を検証するための対照資料として、同時期に普及する篦被付き鏃の分析を行なった。その結果、初期ヤマト政権が生産する整った規範の篦被付き銅鏃と、政権と直接的な関係の希薄な多様な篦被付き鉄鏃の２者が認められることを確認し、中央政権による上質武器の集中生産と地域の分散的生産が併存するあり方が、古墳出現期の武器生産の特質であると評価した。

以上の考察を踏まえた終章では、前漢帝国と政治的な関係を結んだ「王」が北部九州に出現する弥生中期後半からヤマト政権が奈良盆地に成立する古墳前期初頭までを射程に入れて、鉄剣を中心とする武器の変遷を列島の社会政治的変化と関連づけて提示した。とくに政治史上の大きな画期であるヤマト政権の成立については、武器の生産・流通管理の貫徹が政権成立の前提となったのではなく、政権による武器の独占的掌握についてもなお不十分であったことを明らかにした。ヤマト政権の正統性を象徴する一部の武器が管理の対象となった一方で、在地の有力者による武器生産と流通の併存状況から見て、古墳出現期においては上部社会だけが早熟的に国家的様相を備え始めたのに対して、地域の下部社会では弥生時代以来の集団関係、地域関係も色濃く残存しており、そこに古墳出現期社会の特質を見いだしうると結論づけた。

【論文審査の結果の要旨】

古代国家の形成過程において、軍事力が一定の役割を果たしたことはいうまでもなく、考古学においてその実態をつかむ上で、武器研究が主要なアプローチの一つとなることは、分厚い研究史の存在を見ても明らかである。本論文は、列島の国家形成過程の大きな画期である古墳出現期にもっとも普及した武器である鉄剣について、徹底的な資料集成と詳細な型式研究を基礎に、各種鉄剣の系譜、変遷、生産、流通などの諸論点にわたる実態に迫った点で、高いレベルの体系性を備えた専論研究としての評価を与えることができる。

とりわけ、長茎短剣に関して、「弥生中期後半群」と「弥生終末期群」が系統差を含む非連続的な存在であることを明らかにした点や、「弥生終末期群」や「蕨手状装飾鉄剣」の分布を手がかりに朝鮮半島から日本海沿岸を経由して東日本に至る物流ルートを復元した点などは、鉄剣研究に新たな展望を開く主張として評価できる。また、製作地について議論のある関部双孔鉄剣について、剣身や穿孔状況の詳細な観察によって日本列島製が主体を占めるとの結論を導いた手続きは説得的であり、ライアン氏が優れた資料観察能力を有していることを十分に示すものである。さらに、鉄製武器の造りの精粗や法量の違いに着目して、中央政権が製作や流通に関与したものと在地の有力者レベルで行なわれたものがあることを見いだし、武器を介した政権の地域把握の問題に論及した点は、今後の研究の発展を期待させるものである。

ただ、高い評価が与えられる本論文にも、改善すべき問題点は残る。鉄剣の実態解明に考察の重点を置きすぎたために、多様な鉄製品と社会変化や権力形成の関係が論じきれなかったことや、古墳出現期研究の主要論点ともなっている青銅鏡や石製品、墳墓構造などに目配りができなかったことなどは、今後に残された課題である。

とはいえ、詳細な遺物研究に立脚して弥生時代から古墳時代に至る鉄剣の全体像を体系的に解明し、鉄製武器の生産・流通のあり方から政権の支配構造にまで論及した本論文は、多くの新たな主張を含んだ意欲作として評価できるものである。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。